

[原著論文：査読付]

日本所蔵の漢籍に関する一考察
——『西廂記』の孤本をめぐって——

黄 冬柏*

A Study on Chinese Classical Publications Owned by Japan
: With a Focus on the Editions of “Xixiangji (西廂記)”

Dongbai HUANG*

Abstract

This paper is studied with an investigation about the feature of the “Xixiangji (西廂記)” editions in Japan and the historical background transmitted to Japan.

“Chongke Yuanben Tiping Yinshi Xixiangji (重刻元本題評音釈西廂記)”・“Chongjiao Beixixiangji (重校北西廂記)”, owned by Naikakubunko of National Archives (国立公文書館内閣文庫), and “Xinke Kaozheng Guben Dazi Chuxiang Shiyi Beixixiang (新刻考正古本大字出像釈義北西廂)”, owned by Seikidobunko of Ishikawa Takeyoshi Memorial Library (石川武美記念図書館成篁堂文庫) were investigated, and these form of the publications and feature of the contents were made clear by adding collection consideration of Chinese relevant literature. Also the process introduced into Japan was considered.

KEY WORDS : Chinese Classical Publications (漢籍), Edition (版本), “Xixiangji (西廂記)”

1. はじめに

漢籍とは何か。それは言うまでもなく漢文で書かれた書籍であり、約一千年前から日本へ伝来した中国の古典書物である。日本所蔵の漢籍は豊富であり、中でも、中国本土ですでに失われた孤本は少なくない。中国古典戯曲の名作である『西廂記』の版本に限って言えば、国立公文書館内閣文庫をはじめ、宮内庁書陵部及び成筥堂文庫などに十種余りが確認されている。

そこで本稿は、国立公文書館内閣文庫に所蔵されている『重刻元本題評音釋西廂記』と『重校北西廂記』、及び石川武美記念図書館成筥堂文庫に所蔵されている『新刻考正古本大字出像釈義北西廂』の実見調査を実施し、中国の関連文献の考察を加えることによって、これらの版本の形式と内容の特徴を明らかにしたい。また、これらの版本の旧蔵者である林羅山・徳富蘇峯の漢籍収集についても、近世日本における中国古典の受容という視点から、当時の伝来の経路や方法及び受容の実態を探ってみたい。

2. 『重刻元本題評音釋西廂記』について

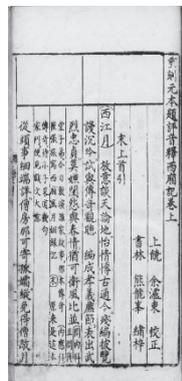
『重刻元本題評音釋西廂記』は、内閣文庫所蔵の熊龍峯刊本の他、上海図書館所蔵の徐士範刊本（以下「徐士範本」と略す）及び中国国家図書館所蔵の劉龍田刊本（以下「劉龍田本」と略す）がある。

2.1 内閣文庫所蔵の熊龍峯刊本

内閣文庫所蔵の『重刻元本題評音釋西廂記』（以下「熊龍峯本」と略す）は、明の余瀛東が校正し、万暦二十年（1592）に熊氏忠正堂より刊行された。

線装二冊（25×14.5cm） / 四周单边 / 匡廓（20.5×13cm）
正文（17cm）半葉10行1行20字 / 科白 小字双行低1字格
眉欄（3cm）鐫評語（眉批）
小字6字 / 正文界線上小字評語（傍批）
版心（上）「西廂記」白口 単黒魚尾 魚尾（下）卷次 葉数
挿絵 本文二十齣 附録前 合計二十三枚

『釋義』『字音』本文 附録『鶯紅下棋』末 眉欄なし24字
押印「内閣文庫」「昌平坂学

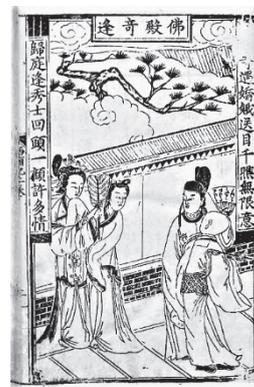


「熊龍峯本」第1葉
内閣文庫蔵本に拠る（筆者撮影、以下同）

問所」「浅草文庫」「林氏蔵書」「江雲渭樹」「日本政府圖書」

「林氏蔵書」と「江雲渭樹」が林羅山の蔵書印なので、熊龍峯本は、もともと林羅山の旧蔵であったことが分かる。林羅山（1583-1657）は、江戸時代初期の朱子学派儒学者であり、徳川家の四代将軍（家康・秀忠・家光・家綱）に仕え、初期の江戸幕府の土台作りに大きく関わって様々な制度などを定めていった。慶長十二年（1607）、林羅山が長崎で中国の薬学名著である『本草綱目』を入手し、駿府に滞在している家康に献上している。¹⁾ こういった記録と内閣文庫の沿革から、熊龍峯本も『本草綱目』などの漢籍と一緒に長崎で林羅山に購入された後、昌平坂学問所、浅草文庫を経て内閣文庫に収められたと推測できる。

熊龍峯本は上巻22・42葉と下巻37・48葉を欠いており、そのため第四・七・十八・二十齣の四枚の挿絵がない。熊龍峯本は南曲伝奇の体裁である「末上首引」から始まり、「題目」・「正名」の後に本文である第一齣『佛殿奇逢』が続く。元雑劇の体裁である一本四折、五本二十折ではなく、二十齣（幕）に分けている。明代においては、南曲伝奇が益々隆盛し、北曲雑劇が日々衰退していったため、『西廂記』の坊刻本もその当時の市場の需要に応えたものであろう。また、挿絵に関しても、文字を読むばかりではなく「絵」をも見たいという読者の嗜好に合わせ、販路を拡大させるという商業的な意図があったと思われる。熊龍峯本の挿絵は上辺に標題（四字、『錢塘夢』は三字）、左右両側に各十二字前後の対聯がある。欠落する第四・七・十八・二十齣の挿絵を除いて、全十九枚の挿絵は次の通りである。（写真は内閣文庫蔵本に拠るもの）



第一齣 佛殿奇逢



第二齣 僧房假寓



第三齣 墙角聯吟



第五齣 白馬解圍



第十三齣 月下佳期



第十四齣 堂前巧辨



第六齣 紅娘請宴



第八齣 琴心寫懷



第十五齣 秋暮離懷



第十六齣 草橋驚夢



第九齣 錦字傳情



第十齣 玉臺窺簡



第十七齣 泥金捷報



第十九齣 詭謀求配



第十一齣 乘夜逾牆



第十二齣 倩紅問病



錢塘夢



鶯紅對弈



園林午夢

以上の挿絵は、中心に置かれた人物が舞台俳優のようなくさし、しかも実際の舞台配置と同じように左右両側に対聯を配置しており、まるで舞台をそのまま切り取ったかのような印象を受ける。この挿絵の構図もまた読者の興味を増し、販路を拡大するための試みであると考えられる。明刊本の挿絵は主に導読（閲読の指導）、促銷（販路の拡大）、装飾と批評の役割がある。明代における建陽の書林は最も繁栄の時期を迎えており、坊刻も例外なく、刊行した小説と戯曲の中に大量な挿絵が附されている。その中には双峯堂の余象斗によって刊行された作品が最も多く、万暦十六年（1588）に刊行された『京本通俗演義按鑑全漢志伝』の上図下文式はその代表的な挿絵である。また、『新刻按鑑全像批評三国志伝』のように、上評中図下文式という版式も見られる。これらの版式は挿絵のスペースが制限されるため、狭くて窮屈な感じが否めない。これらと比べて、熊龍峯本の単面整版式では、人物が生き生きとして画面に気品と迫力があり、しかも鮮やかな標題と対聯を加えることによって、読者により一層の美感と楽しさを与える。上図下文式の歴史小説を大量に刊行した明末建陽の出版の中で、恋愛物語を題材とする戯曲の熊龍峯本とその単面整版式による挿絵は非常に貴重な存在だと言える。

2.2 三種『重刻元本題評音釋西廂記』の伝承関係

『西廂記』刊本は覆刻されたものを除いて、全く同じ刊本が殆どない。三種の『重刻元本題評音釋西廂記』についても、版式・体裁及び本文は基本的に同じであるものの、序文の有無、題評の異文、音釋の位置と詳略、附録の増減、及び挿絵と刻工などにおいて異同がある。

万暦八年（1580）に刊行された徐士範本には程巨源が著す「崔氏春秋序」と徐士範が自ら書いた「重刻西

廂記序」が載せており、この二篇の序文は『西廂記』の作者及びその評価などについて述べている。熊龍峯本には「崔氏春秋序」を載せて「重刻西廂記序」がなく、万暦二十九年（1601）に刊行された劉龍田本にはどちらもない。また、徐士範本には挿絵がなかったのに対して、熊龍峯本には二十三枚の挿絵があり、劉龍田本は熊龍峯本の挿絵をそのままに翻刻する。徐士範本には黄鑑・黄鈇・黄峯・黄汝清など著名な刻工の名前が彫られており、熊龍峯本と劉龍田本の本文には刻工の名前が標されていないが、挿絵に「盧玉龍刊」と記されている。

『重刻元本題評音釋西廂記』に収録される附録にも異同がある。徐士範本と熊龍峯本は、『西廂会真記』（すなわち元稹『鶯鶯伝』）を『西廂記』物語の淵源として収めている。読者には『西廂記』の出典を理解させると同時に、小説と戯曲の異なる創作趣旨と結末を比較させることができる。一方、『錢塘夢』・『園林午夢記』及び『松金釧減減玉肌論』などの附録は、書坊が人々の興味を引こうとして収めたものであり、実際には『錢塘夢』と『西廂記』とは関係性を有さない。熊龍峯本と劉龍田本は徐士範本より『蒲東崔張珠玉詩集』、『鶯紅對弈』、『西廂別調』などの五種を多く収めているが、これも異なる読者の嗜好を満足させるためであろう。

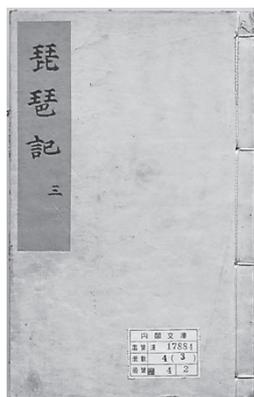
徐士範本は現存する早期の『西廂記』評点本であり、熊龍峯本と劉龍田本とは徐士範本の評語内容と類似しているが、相違点も見られる。例えば、第四齣の「三寶：佛也，法也，僧也」と第十一齣の「菱花，鏡也。状若菱花。魏武帝時有此制」という題評は徐士範本にはなく、熊龍峯本と劉龍田本にある。もともとあったものを徐士範本が削ったか、それとも熊・劉両本が新たに加えたかは不明である。また、徐士範本が欠落して、熊龍峯本と劉龍田本が完全に残る題評である。例えば、第六齣の「你明博得二句□□□反承，妙□」，第七齣の「□□□人停婚，自是睽□女子，□□□憂離之思轉典逼迫甚矣」，「□本作「我却待□轉秋波」，「□□信然，豈有□多之病歟」，第十五齣の「眼中流血心水成灰，□商人□□」というところでは（□：闕字を表す），徐士範本の欠落箇所を熊龍峯本で補うことができる。第七齣の徐士範本は「江州司馬，白樂天」であり、熊龍峯本と劉龍田本は「江州司馬，白樂天事」であるが、次の題評を見ると、三つの刊本はすべて「白頭吟，卓文君事」となるので、「白樂天」の後にも「事」の一字があると考えた方がわかりやすい。

これまで見てきた題評の異同をもとに、三種の『重刻元本題評音釋西廂記』の性格と『西廂記』版本にお

ける位置づけをどう判断すればよいだろうか。中国における『西廂記』版本研究の第一人者である蔣星煜(1920-2015)は熊龍峯本を実見しないまま、「熊龍峯刊本も徐士範刊本によって翻刻されたもの」と結論付けている。²⁾しかし、上述した題評の異同、また附録の増減及び挿絵の有無などを考え合わせると、「熊龍峯刊本も徐士範刊本によって翻刻されたもの」とは言いがたい。おそらく熊龍峯本は徐士範本そのものではなく、徐士範本の元本に基づいて刊行されたもの、言い換えれば、熊龍峯本と徐士範本は同じ祖本であったが、熊龍峯本は刊刻する時に徐士範本を参照しながらも新たに挿絵を加えたものだと考えられる。また、劉龍田本は完全に熊龍峯本を覆刻したものと思われる。

3. 『重校北西廂記』について

国立公文書館内閣文庫に所蔵されている継志齋刊の『重校北西廂記』は、『重校北西廂記』版本系統の代表的な版本である。『重校北西廂記』と題する刊本は、継志齋刊本の他、国内においては、無窮会図書館所蔵の万曆刊本(以下「無窮会本」と略す)及び天理図書館所蔵の三槐堂刊本(以下「三槐堂本」と略す)がある。また、中国本土においても、中国社会科学院文学研究所の蔵本及び国家図書館所蔵の羅懋登注釈本などがある。



「継志齋本」表紙(『琵琶記』三)内閣文庫蔵本に拠る、以下同

3.1 内閣文庫所蔵の継志齋刊本

内閣文庫所蔵の『重校北西廂記』(以下「継志齋本」と略す)は、明の陳邦泰が校正し、万曆二十六年(1598)に継志齋より刊行された。高明の『琵琶記』と合刊しており、線装の全四冊のうち二冊である。第一、二冊は『琵琶記』であり、第三冊は『重校北西廂記』であり、第四冊は『重校北西廂記考証』、『錢塘夢』、『園林午夢』、『蟾宮曲四首』、『重校蒲東珠玉詩』などの附録である。

線装二冊(28×17.4cm) / 四周単辺 / 匡廓(22.2×14.5cm)

正文(19.2cm)半葉10行1行20字 / 科白小字双行眉欄(3cm)鐫評語(眉批)小字5字 / 附録眉欄なし23字

版心(上)「北西廂記」(下)卷次 葉数

第三冊「刻重校北西廂記序」(8行14-15字)一葉 / 「重校北西廂記総評」一葉 / 「重校北西廂記凡例」二葉 / 「重校北西廂記目錄」半葉

本文第一卷(第一齣～第四齣)十九葉 / 第二卷(第五齣～第八齣)二十二葉 / 第三卷(第九齣～第十二齣)十七葉 / 第四卷(第十三齣～第十六齣)十九葉 / 第五卷(第十七齣～第二十齣)十九葉

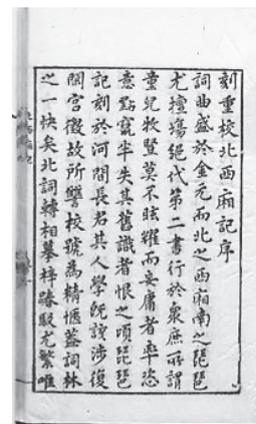
挿絵「鶯鶯遺照」半葉 / 「明伯虎唐寅寫于田汪耕摹」各齣(第十・十二・十四・十九齣除外)前計十六枚双面連結式挿絵

第四冊『重校北西廂記考証』(『會真記』ほか64則)三十五葉

附録(『錢塘夢』、『園林午夢』、『蟾宮曲四首』)七葉 / 『重校蒲東珠玉詩』二十二葉

序文は「刻重校北西廂記序」と題されており、内容は以下の通りである。

詞曲盛於金元、而北之『西廂』・南之『琵琶』、尤擅場絶代。第二書行於衆庶、所謂「童兒牧豎、莫不眩耀」、而妄庸者率恣意點竄、半失其舊、識者恨之。頃『琵琶記』刻於河間長君、其人學既該涉、復聞宮徵、故所讎校、號為精愜、蓋詞林之一快矣。北詞轉相摹梓、踏駁尤繁、惟顧玄緯・徐士範・金在衡三刻、庶幾善本、而詞句增損、互有得失、余園廬多暇、粗為點定、其援據稍僻者、略加詮釋、題於卷額、合『琵琶記』刻之。風雨之辰、花月之夕、把卷自吟、亦可送日月而破窮愁、知者當勿謂我尚有童心也。



刻重校北西廂記序

萬曆壬午夏龍洞山農撰、謝山樵隱重書於戊戌之夏日

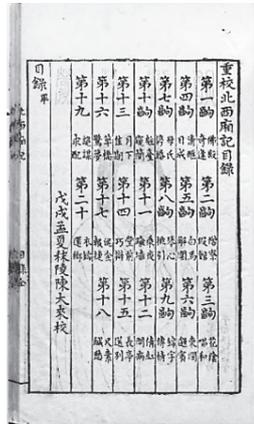
この序文の識語に従うならば、この本は万曆壬午(十年、1582)龍洞山農刊『重校北西廂記』の覆刻である。序文から、龍洞山農の刊行の時点で『琵琶記』と『西廂記』の二本を合刻していたことがわかる。また、継志齋刊『重校琵琶記』は、河間長君が嘉靖戊午(三十七年、1558)に書いた「刻重校琵琶記序」も載せており、しかも「万曆戊戌大來甫重録」を注釈している。卜鍵氏の考証に拠れば、龍洞山農は明の隆慶・万曆(1567-1620)の間に活躍した泰州学派の一人焦竑(1540-

1620) の別號であるとされる。³⁾

継志齋本は元雜劇の体裁である一本四折で五本とするのではなく、全体を二十齣(幕)に分けており、その目録は以下の通りである。

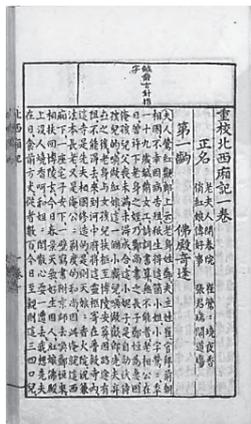
「重校北西廂記目録」

- 第一齣 佛殿奇逢
 - 第二齣 僧寮假館
 - 第三齣 花陰唱和
 - 第四齣 清醮目成
 - 第五齣 白馬解圍
 - 第六齣 東閣邀賓
 - 第七齣 母氏停婚
 - 第八齣 琴心挑引
 - 第九齣 錦字傳情
 - 第十齣 粧臺窺簡
 - 第十一 乘夜踰牆
 - 第十二 倩紅問病
 - 第十三 月下佳期
 - 第十四 堂前巧辯
 - 第十五 長亭送別
 - 第十六 草橋驚夢
 - 第十七 泥金報捷
 - 第十八 尺素緘愁
 - 第十九 詭謀求配
 - 第二十 衣錦還鄉
- 戊戌孟夏秣陵陳大來校



重校北西廂記目録

この「重校北西廂記目録」の末に「戊戌孟夏秣陵陳大來校」と署名しており、「重校北西廂記凡例」にも「秣陵陳邦泰校録」と末署している。ここから、継志齋本は戊戌(万曆二十六年, 1598), 陳邦泰の校正によって刊行されたことがわかる。陳邦泰は、字大來, 秣陵(今の南京)の人である。経営する継志齋は明の著名な書坊であり、多くの書籍を刊刻し、とりわけ戯曲の刊行が有名である。この万曆二十六年刊の『重校北西廂記』のほか、万曆二十七年刊の『新鐫女貞觀重鐫玉簪記』・『重校旗亭記』, 万曆三十六年刊の『新刊河間長君校本琵琶記』・『重校錦箋記』・『重校量江記』, 万曆四十年刊の『重校義俠記』, 及び年代不明の『新鐫唐明皇秋



重校北西廂記一巻

夜梧桐雨雜劇』・『新鐫杜牧之詩酒揚州夢雜劇』・『新鐫鉄拐李度金童玉女雜劇』・『重校窃符記』・『重校紅拂記』などの継志齋より刊行された戯曲刊本が現存する。

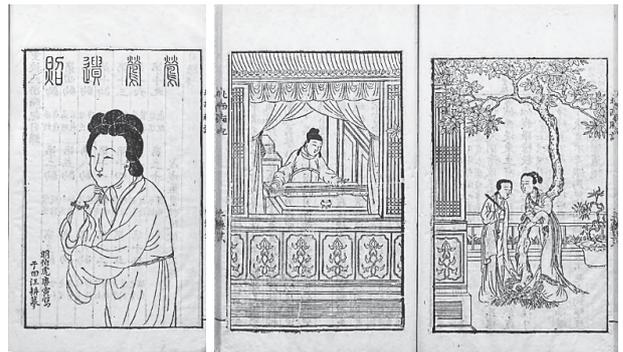
継志齋本は一巻が四齣あり、齣ごとに四文字の標題を付け、また四齣ごとに一組の「正名」がある。

重校北西廂記一巻

正名 老夫人閑春院 崔鶯鶯燒夜香
俏紅娘傳好事 張君瑞開道場

第一齣 佛殿奇逢

前述のように、元雜劇は一本四折で、「題目」と「正名」がそれぞれ一句或いは二句あり、その「正名」の末句をもって劇名とするのが基本である。継志齋本が四齣ごとに巻にまとめて正名を持つのはその名残であろう。一方、全体を二十齣に分けるのは南曲伝奇の影響である。



鶯鶯遺照

第八齣「琴心挑引」挿絵

継志齋本は単面の「鶯鶯遺照」と十六枚の双面連結式の挿絵がある。明代における書林は最も繁栄の時期を迎えており、坊刻も例外なく、刊行した小説と戯曲の中に挿絵が多く附されている。前述した熊龍峯本の単面整版式と比べて、継志齋本の双面連結式では、余白が倍に広くなり、人物と景色が思う存分に描写できている。画線がなめらかになっている。

第四冊にまとめられている附録は、明刊本『西廂記』の中でも最も内容豊富なものの一つである。『重校北西廂記考証』には六十四則の詩文を収めているほか、『錢塘夢』・『園林午夢』・『蟾宮曲四首』・『重校蒲東珠玉詩』などの附録がある。出版商が刻印する刊本の核心部分の本文はどの本も大差ないため、附録が挿絵と同様にセールスポイントとなる。そこで大量の序文・釈義・注音・評語など読者に本文の内容を理解させるための工夫を加え、さらに元になった『会真記』やその他の『西廂記』物語に関する題詠・詩詞・考証資料なども付け加え、ますます読本としての性質に接近した。挿絵と附録は書坊が自らを標榜する大きな要素となり、遂には読者にとって不可欠のものになったのである。⁴⁾

3.2 三種『重校北西廂記』の異同

日本に残る三種『重校北西廂記』について、版式・体裁・本文・題評及び挿絵は基本的に同じであるもの

の、序文と釋義・注音の有無、附録の増減、及び挿絵の刻工名などにおいて異同がある。

繼志齋本には龍洞山農が著す「刻重校北西廂記序」を載せており、この序文は『西廂記』の評価と民間の流布状況、及び繼志齋本の刊刻経緯などについて述べている。無窮会本と三槐堂本には序文がない。「重校北西廂記目録」と「重校北西廂記総評」は、三槐堂本と繼志齋本と同一のものであるが、無窮会本には見当たらない。また、三種の挿絵は類似しているが、無窮会本と三槐堂本には「次泉刻像」と記されている。

無窮会本は各齣の末に『釋義』『音字』があるが、三槐堂本は『釋義』のみあって『音字』がない。これに対して、繼志齋本は各齣の末の『釋義』と『音字』がなく、かわりに眉欄に語釈や音注が見える。三種『重校北西廂記』は収録される附録にも異同がある。前述したように、繼志齋本の附録は、明刊本『西廂記』の中でも最も内容豊富なものの一つであり、書坊が人々の興味を引こうとして収めたものである。一方、三槐堂刊本は『錢塘夢』・『園林午夢』・『新增西廂別調』・『打破西廂八詠』・『蟾宮曲四首』などの五種を収めているが、無窮会本には附録が皆無である。

これまで見てきたように、日本所蔵の三種『重校北西廂記』は版式・体裁・本文・題評及び挿絵は基本的に同じであるから、原本は同一のものと見なしてよからう。語釈・注音・附録・及び挿絵の刻工名などにおいての異同は他の万暦坊刻諸本に見られるものとおおよそ同じである。

4. 『新刻出像釋義大字北西廂』について

石川武美記念図書館（旧お茶の水図書館）成篁堂文庫に所蔵されている少山堂刊の『新刻出像釋義大字北西廂』は、現存する『西廂記』刊本の中で弘治十一年（1498）に刊行された『新刊奇妙全相注釋西廂記』（学界では「弘治本」と称す）に次ぐ古いものであり、しかも最初の『西廂記』評点本（評点本：原作に評語を付け加えた版本一筆者注）でもある。

4.1 成篁堂文庫所蔵の少山堂刊本

成篁堂文庫所蔵の『新刻出像釋義大字北西廂』（以下「少山堂本」と略す）は三巻（首巻、上巻、下巻）、明の謝世吉が訂正し、万暦七年（己卯、1579）に胡氏少山堂より刊行された。

線装一冊（25.8×16.4cm） / 四周双辺 / 匡廓（21.5×14.5cm）

正文（18.5×14.5cm）半葉11行1行22字 / 科白小字双行 1行22字

眉欄（3cm）鐫評語（眉批） / 小字5字或4字 / 正文界線上小字評語（傍批）

挿絵 正文二十齣前二十枚 / 『釋義』正文末尾

版心「刻像釋義西廂」白口 単黒魚尾 魚尾（下）巻次（「首巻」「上巻」「下巻」）葉数

表紙「新刻出像釋義大字北西廂」 / 序文「刻出像釋義西廂記引」 / 欄 評語四条

押印「蘇峯」「徳富氏弥藏記」

首巻（1葉-42葉）：首行に「新刻出像釋義大字北西廂總覽首巻」、版心に「刻像釋義西廂首巻」。〔正本上下巻目録〕の後に、『錢塘夢』など五篇の雜録が続く。上巻（1葉-51葉）：首行に「新刻攷正古本大字出像釋義北西廂上巻」、次行に「皇明江右逸樂齋訂正/書林胡氏少山堂梓行」。〔副末開場〕、第一齣の挿絵「佛殿奇逢」、〔西廂正本上巻〕、「元王實甫編/明謝世吉訂」と続き、正文第一齣から第十齣までがある。下巻（第1葉-44葉）：首行「新刻出像釋義古本大字北西廂記下巻」、〔元王實甫編/明謝世吉訂〕の後に正文第十一齣から第二十齣までがある。末尾に「萬曆己卯秋月/金陵胡少山梓」とあり、引文に「己卯春月」とあるので、少山堂本は春から秋までの半年間で刊行したと推測できる。

序文は「刻出像釋義西廂記引」と題されており、内容は以下の通りである。

余嘗病人之論詞曲者曰：「詞可以冠世，詞可以快心，詞奇而新，詞深而奧」。殊不知詞由心發，義由世傳，作者未必無勞於心，而述者亦未必無補於世也。坊間詞曲，不啻百家，而出奇拔萃，惟『西廂傳』絕倡。實由元之王實甫所著，而世云關漢卿作者，何其謬焉！雖然，亦有由也。太抵『草橋驚夢』以前，迺王氏之所著，以後由漢卿之所續而成也。『奇逢普救』固已逸而樂矣。『月下聽琴』得非婉而妙乎？『長亭送別』固已慘而切矣。『草橋驚夢』得非悲而戚乎？『東閣筵開』，『粧臺東至』，實甫之錦心寫於此矣。『尺素緘愁』，『鄭恒求配』，漢卿之秀腸見於斯乎！蓋此傳刻不厭煩，詞難革故，梓者已類數種，而貨者似不愜心。胡氏少山，深痛此弊，因懇余校錄。不佞搆求原本，並諸刻之復校閱，訂為三帙。『蒲東雜錄』錄於首焉。補圖像於各折之前，附釋義於各折之末，是梓誠與諸刻迥異耳！鑒視此傳，奚以玉石之所混云。

萬曆己卯春月江右鄙人謝氏世吉甫識之於少山書堂
謝世吉が書いたこの序文は、以下の三点（原文波線部）が重要である。

(1)、「書坊の戯曲は、百以上あったが、卓抜しているものは、『西廂伝』のみである」。

ここでは多くの戯曲作品の中で『西廂記』だけに高評を下している。

(2)、「およそ『草橋驚夢』までは、王氏の作であり、その後は漢卿による続作である」。

この「王作関続」説は後世の作者問題に多大な影響を与えている。

(3)、「私は原本を購入し、ほかの刻本と併せて校閲し、三巻とする。『蒲東雜録』は巻首に置いて、挿絵を各折の前に補い、釈義を各折の末に附する。この刊本は他の刻本と全く異なるものである」。

このように少山堂本の刊行経緯が説明されているが、ここで言う「原本」とはどんなテキストだろうか。少山堂本は元雜劇の体裁である一本四折、五本二十折ではなく、当時に流行した伝奇の影響を受けて二十齣(幕)に分けており、その標題は以下の通りである。

正本上下巻目録 凡二十齣

第一 佛殿奇逢 第二 僧房假寓 第三 墻角聯吟
 第四 齋壇鬧會 第五 白馬解圍 第六 紅娘請宴
 第七 夫人停婚 第八 月下聽琴 第九 錦字傳情
 第十 粧臺窺簡 第十一 乘夜踰牆 第十二 倩紅問病
 第十三 月下佳期 第十四 堂前巧辯 第十五 送別長亭
 第十六 草橋驚夢 第十七 捷報及第 第十八 尺素緘愁
 第十九 鄭恆求配 第二十 衣錦還鄉

少山堂本には正文二十齣のほか、『錢塘夢』・『蒲東珠玉詩』・『秋波一轉論』・『閨怨蟾宮』・『新增園林午夢』という五種類の雜録を収める。少山堂本の挿絵は双面(一葉表裏)連結式で上辺に標題(四字)、左右両側に對聯(各十一字)を置き、作画者について「余仁刻像」と記す。上巻13・17・39葉と下巻13葉を欠落するため、第三・四・八・十六齣の四枚の挿絵が片面(半分)しか残ってない。全二十枚挿絵の標題と對聯は次の通りである。(□:關字を表す)

第一齣 佛殿奇逢 相國云亡, 擬葬博陵因路阻;
 夫人扶柩, 暫依蕭寺守孀孤。
 第二齣 僧房假寓 侍女參禪, 為訂法僧三寶會;
 張生假寓, 謾思相府百年緣。
 第三齣 □□吟詩 □□□□, □□□□□□;
 (關13葉裏) 佳人有意, 月明禱告粉牆頭。
 第四齣 □□鬧會 □□□□, □□□□□□;
 (關17葉裏) 張先生禮僧三寶, 密約焚香。
 第五齣 白馬解圍 金鼓連天, 半萬賊兵圍普救;
 玉書投寨, 三千人馬出蒲關。
 第六齣 紅娘請宴 侍妾相邀, 東閣大開酌彩筆;

張生聞請, 西廂款步赴藍橋。
 第七齣 夫人背盟 君瑞尋盟, 準備筵中諧鳳侶;
 夫人爽信, 空勞窗下畫娥眉。
 第八齣 月下□□ 諧老無緣, 空把相思調玉軫;
 □□□□, □□□□□□。(關39葉裏)
 第九齣 錦字傳情 早夜傳書, 落得鞋尖沾露濕;
 晨昏伏枕, 徒勞夢裡得春多。
 第十齣 粧臺窺簡 四句新詩, 包藏着跳牆啞謎;
 一場假怒, 遮掩了期約幽情。
 第十一齣 乘夜踰牆 賣弄才高, 尚難猜四言詩句;
 誰知膽大, 卻跳過百尺垣牆。
 第十二齣 倩紅問病 紅送藥方, 片紙暗傳雲雨約;
 生聞佳信, 數言真勝洞靈丹。
 第十三齣 月下佳期 張珙會盟, 倚定門兒願望眼;
 鶯鶯赴約, 懶將羅帶結同心。
 第十四齣 堂前巧辯 侍妾訴一段情由, 將沒做有;
 夫人主百年姻眷, 弄假成真。
 第十五齣 執袂長亭 兩下離愁, 任是車兒難載起;
 四行別淚, 倩教河伯為澆來。
 第十六齣 草橋□□ 勞役不堪, 鞍馬忙投茅店靜;
 □□□□, □□□□□□。(關13葉表)
 第十七齣 捷報及第 蕭寺成婚, 今喜奪魁榮相國;
 粧樓覓簡, 聊將心事奇才郎。
 第十八齣 尺素緘愁 寄物慰思, 慎囑貯箱須愛護;
 封書酌望, 叮嚀在客要維持。
 第十九齣 鄭恆求配 密地見紅娘, 还想崔門舊好;
 當場辭鄭子, 已借君瑞新婚。
 第二十齣 衣錦還鄉 衣錦榮歸, 重喜結鸞儷鳳侶;
 承恩謝闕, 共爭夸才子佳人。

以上の標題と對聯を読むと、文字数は整っているが、元雜劇『西廂記』の美辭麗句に比べて浅薄通俗だと言える。

少山堂本の所蔵されている成篁堂文庫は、石川武美記念図書館を創設した石川武美(1887-1961)が親交のあった徳富蘇峯から昭和十五年に一括購入した文庫である。成篁堂文庫の旧蔵者である徳富蘇峯(1863-1957)は、明治から昭和にかけてのジャーナリスト・思想家・歴史家・評論家であり、『国民新聞』を主宰し、『近世日本国民史』を著したことで知られる。蘇峯は号で、本名は猪一郎、文久三年(1863)肥後国上益城郡杉堂村(今の熊本県益城郡益城町上陳)で生まれ、若い頃から四書・五経・『左伝』・『史記』・『歴史網鑑』・『国史略』などの日中の古典を読んだ。明治二十年(1887)、東京で民友社を設立し、雑誌『国民之友』を創刊、明治二十三年には『国民新聞』を発刊し、ジャーナリス

トとして活躍した。歴史家・評論家・政治家としても活動する傍ら、明治三十年代から約半世紀にわたって、精力的に古典籍・古文書を収集した。成篁堂文庫が所蔵する古典籍・古文書の総数は約十万点に及んでいる。古典籍は、奈良・平安時代から江戸時代までの国書・漢籍・仏書をはじめ、名家自筆本、中国の宋・元・明版、朝鮮本など、広い分野にわたっている。古文書は、平安時代から近世にかけての大乗院文書、中世から近世初頭までの武家文書、寺社文書、幕末維新関係文書などを所蔵している。

徳富蘇峯はどのように漢籍を集めたのか。蘇峯は明治二十八年（1895）と大正六年（1917）に外遊で二度中国を訪れ、明治三十六年（1903）に『吉田松陰』を上海通雅書局と南京明道書荘より出版し、『杜甫と弥耳敦』（民友社、大正六年）、『支那漫遊記』（民友社、大正七年）、『漢籍を観る』（大東出版社、昭和十年）などの専著を著した。蘇峯の交友範囲は広いが、ここではその一人である島田翰（1879-1915）の存在を指摘しておきたい。島田翰は明治大正時期の漢学者と書誌学者である。明治四十年（1907）に岩崎弥之助は清の集書家・陸心源（1838-1894）の「皕宋楼」旧蔵書四万数千冊を購入し静嘉堂文庫に収めた時に、島田翰が仲介となった。一方、蘇峯は島田翰の蔵書を買取り、成篁堂文庫の基礎とした。⁵⁾ こういった経緯から、陸心源の旧蔵書を購入する際に、仲介人である島田翰が少山堂本を含む一部の漢籍を買取って、後に蘇峯へ転売したのではないかと推測できる。勿論、蘇峯本人が当時の漢籍伝来の主要基地である長崎、あるいは外遊先の中国本土でこれらの漢籍を購入した可能性も排除できない。

4.2 少山堂本と熊龍峯本の比較

少山堂本と熊龍峯本の版式と内容は非常に似ている。以下に標題・挿絵及び評語などの異同を比較することによって、両者の伝承関係を探ってみたい。

少山堂本、熊龍峯本ともに総目・毎齣の本文と挿絵の三箇所を標題が現われるが、本文の標題を比較すると以下の通りである。また、本文のほか、両者に収録される附録の標題もあわせて示す。

| 齣数 | 少山堂本 | 熊龍峯本 |
|----|------|------|
| 一 | 佛殿奇逢 | 佛殿奇逢 |
| 二 | 僧房假寓 | 僧房假寓 |
| 三 | 牆角聯吟 | 牆角聯吟 |
| 四 | 齋壇鬧會 | 齋壇鬧會 |
| 五 | 白馬解圍 | 白馬解圍 |

| | | |
|----|------|------|
| 六 | 紅娘請宴 | 紅娘請宴 |
| 七 | 夫人停婚 | 母氏停婚 |
| 八 | 月下聽琴 | 琴心寫懷 |
| 九 | 錦字傳情 | 錦字傳情 |
| 十 | 妝臺窺簡 | 玉臺窺簡 |
| 十一 | 乘夜踰牆 | 乘夜踰牆 |
| 十二 | 倩紅問病 | 倩紅問病 |
| 十三 | 月下佳期 | 月下佳期 |
| 十四 | 堂前巧辯 | 堂前巧辯 |
| 十五 | 送別長亭 | 送別長亭 |
| 十六 | 草橋驚夢 | 草橋驚夢 |
| 十七 | 捷報及第 | 泥金捷報 |
| 十八 | 尺素緘愁 | 尺素緘愁 |
| 十九 | 鄭恒求配 | 詭謀求配 |
| 二十 | 衣錦還鄉 | 衣錦還鄉 |

| | |
|-----------|----------|
| (附録) 少山堂本 | 熊龍峯本 |
| | 西廂會眞記 |
| 錢塘夢 | 錢塘夢 |
| 蒲東珠玉詩 | 蒲東崔張珠玉詩集 |
| 秋波一轉論 | 秋波一轉論 |
| 閨怨蟾宮 | 閨怨蟾宮 |
| 新增園林午夢 | 園林午夢記 |
| 鬆金釧減玉肌論 | |
| 鶯紅對弈 | |
| 西廂別調 | |
| 西廂八嘲 | 西廂八詠 |

少山堂本と熊龍峯本の挿絵について異同が見られる。先述のように少山堂本は双面連結式の挿絵を持つが、熊龍峯本は単面整版式となっている点が大きく異なる。そのため熊龍峯本の挿絵の幅は少本の半分であり、少山堂本の挿絵が横長であるのに対して熊龍峯本は縦長となっている。背景などの点での相違点はあるものの、両者の構図はほぼ一致しており、ともに人物が生き生きとして画面に気品と迫力があり、他本の挿絵に比べると芸術性が高い。



少山堂本第十一齣
『新修成篁堂文庫善本書目』に拠る



熊龍峯本第十一齣
内閣文庫蔵本に拠る

少山堂本と熊龍峯本の挿絵において類似する一部の
標題と対聯は以下の通りである。

少山堂本

- 第二齣 僧房假寓 侍女參禪，為訂法僧三寶會。
張生假寓，謾思相府百年緣。
- 第四齣 □□鬧會 □□□□，□□□□□□□□。
(闕17葉裏) 張先生禮僧三寶，密約焚香。
- 第六齣 紅娘請宴 侍妾相邀，東閣大開酌彩筆。
張生聞請，西廂款步赴藍橋。
- 第七齣 夫人背盟 君瑞尋盟，準備筵中諧鳳侶。
夫人爽信，空勞窗下畫娥眉。
- 第十齣 粧臺窺簡 四句新詩，包藏着跳牆啞謎。
一場假怒，遮掩了期約幽情。
- 第十一齣 乘夜踰牆 賣弄才高，尚難猜四言詩句。
誰知膽大，卻跳過百尺垣牆。
- 第十二齣 倩紅問病 紅送藥方，片紙暗傳雲雨約。
生聞佳信，數言真勝洞靈丹。
- 第十四齣 堂前巧辯 侍妾訴一段情由，將沒做有。
夫人主百年姻眷，弄假成真。

熊龍峯本

- 第二齣 僧房假寓 假寓僧房，張琪乘機圖匹配。
來參佛寺，紅娘奉命問修齋。
- 第四齣 齋壇鬧會 崔小姐薦相國父孤魂，虔誠設醮。
張君瑞禮佛法僧三寶，密約焚香。
- 第六齣 紅娘請宴 紅娘奉命來迎，東閣宏開酌彩筆。
君瑞聞言請宴，西廂隨步赴藍橋。
- 第七齣 母氏停婚 張君瑞尋盟赴宴，圖夫妻好合。
崔夫人背德停婚，改兄妹稱呼。
- 第十齣 玉臺窺簡 發來假怒一場，明掩思春外跡。
回奉新詩四句，暗藏乘夜中情。
- 第十一齣 乘夜踰牆 漫道文才海漾深，尚難猜四言詩句。
誰知色膽天來大，卻易跳百尺垣牆。
- 第十二齣 倩紅問病 紅送藥方，片紙暗傳雲雨約。
生聞信息，數言勝服洞靈丹。
- 第十四齣 堂前巧辯 小紅娘訴一段緣因，將無做有。
老夫人主百年姻眷，弄假成真。

熊龍峯本は万曆七年刊の少山堂本より十三年遅れて
上梓されたことになる。では、熊龍峯本は先行する少
山堂本の評語（眉批と傍批）にどのような影響を受け
ているだろうか。紙幅の関係で少山堂本と熊龍峯本の
第一齣のみの評語の異同を表にまとめたものである。

少山堂本と熊龍峯本第一齣評語の対照表

| 少山堂本（萬曆七年） | 熊龍峯本（萬曆二十年） |
|--|---|
| 釋家謂閒耍為「隨喜」。（眉批） | 釋家謂閒耍為「隨喜」。（眉批） |
| 無心處忽相遇。（傍批） | 無心處驀然相遇。（傍批） |
| 「顛」又作「逞」，外方所貢美女名。美女名。又，元人以不花為牛，不刺為牛，不刺為犬。不詳孰是。（眉批） | 「顛不刺」，外方所貢美女名。又，元人以不花為牛，不刺為牛，不刺為犬。於此義不相涉，亦可以備考。（眉批） |
| 傾人之色！（傍批） | 色色傾人！（傍批） |
| 軟鋪輕襯，故顯底樣淺。（眉批） | 殘紅芳逕，軟鋪輕襯，故鞦底樣淺。（眉批） |
| 有情處又相失。（傍批） | 有情處忽然相失。（傍批） |
| 與前「寺裏」句相應。（眉批） | 與前「寺裏遇神仙」句相應。（眉批） |
| 水月觀音飾皆縞素，於時鶯時鶯扶柩，故以為此。（眉批） | 水月觀音飾皆縞素，於時鶯時鶯扶柩，故以為此。（眉批） |
| 「秋波」一句，乃『西廂』一書之大旨。（眉批） | 「秋波」一句，是一部『西廂』關竅。（眉批） |

以上のように、少山堂本と熊龍峯本の標題・対聯および評語は非常に類似している。少山堂本が先に刊行されているため、単純に考えれば熊龍峯本が少山堂本を参照したとなるが、両者の直接的な継承関係の言及はない。それぞれのテキストの表題によれば、熊龍峯本は「元本」に基づいて「重刻」した刊本であり、少山堂本は「原本」を「訂正」して「新刻」したものである。また、両者の対聯は多くの場合、構成と表現において少山堂本が熊龍峯本より優れている。さらに、熊龍峯本の中には少山堂本にない評語も含まれている他、熊龍峯本第四・八・十二・十六齣のそれぞれの末尾に見える【絡絲娘煞尾】曲は少山堂本にはない。これらのことから考えると、熊龍峯本が少山堂本を参照したのではなく、少山堂本が熊龍峯本の原本（祖本）を参照して刊行した可能性が高いと推測できる。

5. おわりに

現存する『西廂記』明刊本は、早期の弘治本から、その内容と体裁が変化し続け、万曆期に至って漸く形を定め、四大版本系統（すなわち『題評音釋』系統、『重校北西廂記』系統、碧筠齋古本系統、万曆間「時本」系統）を形成した。そのうち、徐士範本『重刻元本題評音釋西廂記』、繼志齋本『重校北西廂記』、『重刻訂正元本批点畫意北西廂』及び容與堂本『李卓吾先生批評北西廂記』は、従来四大版本系統の代表作だと認められてきた。⁶⁾

本稿では、熊龍峯本・繼志齋本・少山堂本という三

種の孤本に対し、版式・体裁・序文・本文・題評・釋義・附録及び挿絵などについて考察し、これらの版本の形式と内容の特徴を明らかにした。熊龍峯本は徐士範本の祖本である元本に基づいて刊行されたものであり、劉龍田本は熊龍峯本を翻刻したものである。熊龍峯本は十七世紀の初頭に『本草綱目』などの漢籍と一緒に長崎で林羅山に購入された後、昌平坂学問所、浅草文庫を経て内閣文庫に収められたと推測できる。継志齋本は明刊『重校北西廂記』版本系統中の代表的な版本であり、万暦十年（1582）龍洞山農刻本の覆刻本である。その本文と題評は明らかに弘治本と徐士範本の影響を受けている。少山堂本と熊龍峯本は形式から内容まで非常に類似するが、体裁・標目・挿絵・評語などの異同を具体的に比較し、両者の伝承関係を探ったところ、熊龍峯本が先に刊刻された少山堂本を参照したのではなく、少山堂本が熊龍峯本の原本（祖本）を参照した可能性が非常に高いと推断した。

江戸時代には、幕府及び各地の大名は中国の小説と戯曲に興味を持ち、福建や寧波から多くの漢籍が輸入され、当時の長崎は漢籍東伝の主な基地となっていた。本稿で取り上げる三種の刊本は、日本において『西廂記』及び中国古典の伝播に推進的な役割を果たしたと言える。また、孤本としてのこれらの刊本は、『西廂記』版本変遷の歴史において重要な位置を占めると評価すべきものであろう。

注

- 1) 詳しくは『徳川実紀』（吉川弘文館、1964）第一編所収「台徳院殿御実紀卷五」及び『羅山林先生集』（内閣文庫所蔵）附録卷一所収「年譜」を参照。
- 2) 蒋星煜（1983）「論徐士範本『西廂記』」（『西廂記の文献学研究』所収、上海古籍出版社、73頁）。
- 3) 卜鍵（1986）「焦竑的隱居・交遊与其別號“龍洞山農”」、『文学遺産』第1期。
- 4) 明刊本『西廂記』の挿絵について、瀧本弘之・大塚秀高（2014）『中国古典文学と挿画文化』（勉誠出版）に詳細な論考がある。
- 5) 詳しくは高野静子（1988）『蘇峰とその時代—そのよせられた書簡から』（中央公論社）、（1998）『統蘇峰とその時代—小伝鬼才の書誌学者 島田翰』（徳富蘇峰記念塩崎財団）及び『蘇峰自伝』（中央公論社、1935）を参照。
- 6) 明刊本『西廂記』の刊本系統については、傳田章（1979）『増訂明刊元雜劇西廂記目録』（汲古書院）、張人和（1997）「『西廂記』的刊本系統概観」（『社

会科学戦線』第3期）、陳旭躍（2016）「論明刊『西廂記』的刊本系統」（『励耘学刊』第1期）などが詳しい。

参考文献

- 1) 傳田章（1979）『増訂明刊元雜劇西廂記目録』汲古書院。
- 2) 黄仕忠（2011）『日本所蔵中国戯曲文献研究』高等教育出版社。
- 3) 田仲一成（2020）『明代江南戯曲研究』汲古書院。
- 4) 拙著（2010）『「西廂記」変遷史の研究』白帝社。
- 5) 拙稿（2020）「日本成篁堂文庫蔵孤本『西廂記』再考」（北京大学）『国際漢学研究通訊』第18期。

〔付記〕

本研究は、JSPS科研費（JP19K00383基盤研究C「日本所蔵『西廂記』孤本の調査と研究」）の助成を受けたものである。刊本の閲覧・調査にあたっては、国立公文書館内閣文庫及び石川武美記念図書館成篁堂文庫に大変お世話になったことを厚く御礼申し上げる。

Received date 2020年6月15日

Accepted date 2020年7月24日